

# Jordan

[ヨルダン]  
写真・文＝久野 真一 (JICA広報室)

# 中東地域の礎 期待と希望



年1回ヨルダンで行われる「死海マラソン」の給水所。日本人ボランティアが障がい者の伴走ランナーとして参加。アラブの春以降、治安悪化が懸念されている中東地域でも、ヨルダンは屋外の行事が開催できるほど平穏

a.国境付近では、隣国イスラエルが実効支配するゴラン高原を間近に見ることができる  
b.ワディ・ラム砂漠をジープで回るツアーが観光客に人気だ



船舶が行き交うアカバ湾。イスラエル、エジプト、サウジアラビアの国境が近接している



世界遺産にも登録されているペトラ遺跡

ヨルダンの国花「ブラック・アイリス」。短い春の限られた場所でしかみられない貴重な花だ

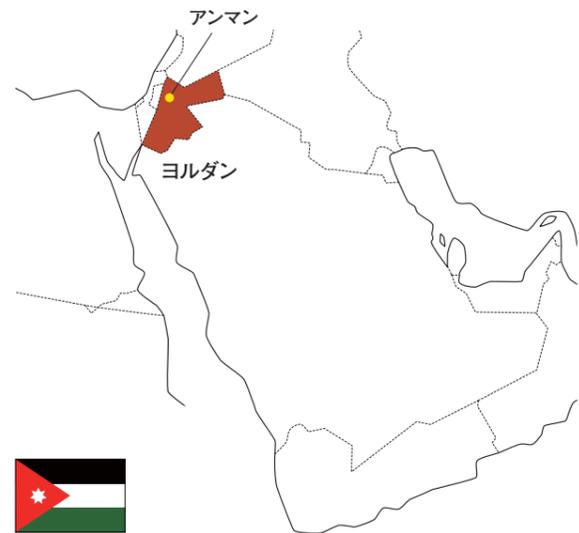


体が浮くことで有名な死海は、年々水位が1メートル低下している



うだろう。石油、テロリスト、砂漠：などだろうか。  
アラブ圏の中心に位置する北海道ほどの小国。イラク、シリア、パレスチナ、イスラエルなど隣接する国や地域の名前を聞くだけで、どこかききな臭い印象を抱いてしまう。しかしヨルダンは、これらの地と一線を画す。2010年12月以降、「アラブの春」に各国が揺れる中、ヨルダンは絶妙なバランスの下で、平和と発展を維持しているのだ。かつては、シリア、イラク、ヨルダンを含む大シリア圏の一地方都市だった首都アンマン。しかし、第二次世界大戦後に「ヨルダン・ハシミテ王国」として独立。イスラム教で由緒あるハシミテ家が王位に就いたことから、この地域で一目置かれる存在になった。国境を接するイラクやサウジアラビアなどの石油産出国のように、天然資源に恵まれているわけではない。国土の大半が半乾燥地帯で水資源も乏しく、どちらかと言えば、アラブ圏の中で財政状況が厳しい国だ。しかし第四次中東戦争以降、イスラエルと和平を結びアラブ圏と欧米諸国を結ぶ玄関口として発展。アンマン市内には多くのアメリカ系企業が進出し、イスラム国家であることを感じさせないくらいに開放的だ。モダンな建築が立ち並んでいる場所もある。

2012年の2月と4月に、中東のヨルダンを訪れる機会を得た。  
「アラブ圏」「イスラム圏」などとひとくくりにされがちな中東地域だが、多くの日本人が抱くイメージほど



首都：アンマン  
 面積：8.9万km<sup>2</sup>(日本の約4分の1)  
 人口：約604.7万人(2010年)  
 言語：アラビア語(英語も一部使用)  
 宗教：イスラム教、キリスト教など  
 1人当たり国民総所得(GNI)：4,340ドル(2010年)  
 経路：直行便はなく、ドバイやドーハなどでの乗り継ぎが一般的。  
 通貨：ヨルダン・ディナール(JOD) 1JOD=約114.7円(2012年5月現在)  
 気候：四季があり、3~4月が春、11月が秋で過ごしやすい。夏の5~10月は最高気温が40度を超える日もある。冬の12~2月は雪が降ることもある。



アンマン東部からイラクにかけて広がる土漠地帯。給水車が行き交う



難民キャンプの学校は、公立学校に比べ老朽化が進んでいる



武装した警察官が取り囲む中行われた教職員のデモンストレーション。近隣のアラブ諸国のように大きな暴動になることは少ない

### ヨルダン料理 羊肉のヨーグルトソースかけごはん 「マンサフ」



鶏肉や羊肉、カリフラワーやニンジン、モロヘイヤ、ひよこ豆など食材が豊富なヨルダン料理。味付けには、カルダモンやタイム、セージ、クミンなどのハーブ類が多く使われるのが特徴だ。

かつて「大シリア圏」と呼ばれたシリア、レバノン、パレスチナ、イスラエルとは、羊肉とニンジンやナスなどの野菜をコメと炊き込む「マグルバー」や、ひよこ豆と野菜のコロッケ「ファラフェル」など共通する料理が多い。

ヨルダンの代表料理は「マンサフ」。アラビア語で「手で食べる」という意味で、砂漠の民ベドウィンの伝統を受け継いだ料理だ。「ヨルダンと言えばマンサフ、マンサフと言えばヨルダン」ともいわれ、結婚式や大切な客をもてなすときには欠かせない。「ジャミード」と呼ばれる山羊の乳を使った乾燥ヨーグルトでやわらかく煮込んだ羊肉を、白いごはんの上に盛りつけて手で食べる。

日本で「マンサフ」が食べられるのが、東京・池袋の「月の砂漠」。ヨルダン人オーナーシェフ、ハレッドさん一家が迎えてくれる異国情緒あふれる雰囲気。子羊の丸焼き料理や水たばこ、アラブ各国の地ビール、地ワインも楽しめる。



**【材料(4人前)】**  
 羊肉1kg/カルダモン10g/塩、黒コショウ少々/インディカ米500g/バター50g/松の実100g/プレーンヨーグルト400ml/小麦粉30g/チキンスープのもと1個/ターメリック少々

- 【作り方】**
1. 圧力鍋に水、カルダモンを半量、塩、黒コショウを入れ、羊肉が柔らかくなるまで煮る。
  2. 別の鍋にインディカ米、水、カルダモンの残り半量、塩、黒コショウを入れて炊く。
  3. プレーンヨーグルトに水(200ml)と小麦粉を合わせて弱火にかけ、チキンスープのもと、ターメリック、バターを加えてかき混ぜながらよく煮る。
  4. 3に1の羊肉を加え5分ほど煮込み、2に乗せる。揚げた松の実を散らす。

アラビアレストラン月の砂漠  
 〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-26-5 東山ビル2F  
 TEL : 03-3980-7057 営業時間 : 18~24時 不定休  
 URL : tsukinosabaku.com/



小高い丘に囲まれた首都アンマン。その間をひしめくように建物が建っている

そんな明るい成長の姿が見られる一方で、人々の心は一枚岩ではない。国民の7割がパレスチナ系という事実。少数だがキリスト教徒もいて、イエス・キリストに縁のある遺跡も多い。しかしどんな宗教であれ、常に「平和」を意識せずとも、誰もがおだやかな暮らしを望んでいるはずだ。

パレスチナ難民に対しては、国際社会による支援が長年続けられている。しかし、世界的な不況の中で支援側の体力も落ち、そのほころびは今、社会的に弱い立場の人々の不満に直結している。

半世紀近くにわたり、もはや一つの都市のように国内各地に存在してきたパレスチナ難民キャンプ。学校教育の現場を取っても、公立学校へ通えるヨ



ルダン人と難民の間には目に見えた格差がある。

彼らの故郷であるパレスチナの地を有効支配するイスラエルの動向のニュースが流れば、平穏でいられなくなる人が出るのは自然かもしれない。同国が抱える問題は中東地域の縮図でもある。

恒久的な平和と繁栄に向けて、中東地域の「礎」となることが期待されるヨルダン。この国の人々に「希望」が近付くよう、日本人も関心を持ち続けることが必要ではないだろうか。

首都の野菜市場で働くエジプト人。隣国からの出稼ぎも多く、ヨルダン人の失業率は高い



難民キャンプ内の学校で、自身が通っていた幼稚園から寄贈されたピアノニカを使って音楽を教える青年海外協力隊（撮影：久野真一）

# 難民支援と 公共サービス整備を通じて 安定した国づくりを

地政学的に中東地域の安定のカギを握るといわれるヨルダン。JICAは、同国に多く暮らすパレスチナ難民支援のほか、水道など公共サービスの向上、観光産業の振興を通して、安定した国づくりに向けた協力を進めている。



パレスチナ難民キャンプの女性たちに化粧クリームや香水、洗剤などの製造方法を指導（下写真撮影：久野真一）



東はイラク、西はパレスチナとイスラエル、南はサウジアラビア、北はシリアと国境を接するヨルダン。パレスチナ問題やアラブの春などに揺れる中東地域の中でも情勢が安定しており、かつ、数少ないイスラエルとの国交がある国として、この地域の安定に貢献し得る国として期待されている。

1948年のイスラエル建国、67年の第三次中東戦争時に大量に発生したパレスチナ難民を受け入れた結果、現在、ヨルダンの人口の3分の2に当たる約450万人がパレスチナ系の人々。国内10カ所ある難民キャンプには約36万人が暮らし、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）をはじめ、各国ドナーやNGOによる支援を受けながら最低限の生活が維持されている。しかし多くの人は仕事がなく、経済的に自立できていないのが現状だ。

そこでJICAは、2006年からヨルダン外務省パレスチナ局が運営する難民キャンプ内の職業訓練・雇用センターの能力強化に対する協力を実施。就業支援に加え、現金収入に直結する技術習得のための研修を行っている。また、09年からは「パレスチナ難民生計向

上のための能力開発プロジェクト」を通じて、慣習上の理由から外で働くことができず、社会的に弱い立場にある女性に対する支援を強化。家庭内でも化粧クリームや香水などを製造できる技術を得ることで、女性が現金収入を得られるようになりつつある。加えて、女性の収入源の確保や家庭内での地位向上を目指し、地域内での啓発活動にも取り組んでいる。

また、難民キャンプ内の学校では青年海外協力隊の活動により、授業で行われないことが多い音楽や図工などの普及を通じて、難民として終わりの見えない生活を送る子どもたちの健全な心の発育を目指す。

パレスチナ難民支援に加え、ヨルダンの最優先課題の一つに挙げられるのが公共サービスの整備不足。中でも深刻なのは水道だ。ヨルダンは国土の約75%が砂漠地帯で水資源が少ないために国内全土で給水制限が行われ、首都アンマンでも週2～3日、地方では週1日程度しか給水が行われていないところもある。これに加え、給水管の老朽化による漏水、水道メーターの故障、盗水などにより、水道庁が利用料を徴収できていない「無収水

率」は約5割に上る。そこでJICAは、05年から「無収水対策能力向上プロジェクト」を通じて水道庁や各地域の水道事業担当者を対象に研修を行い、漏水の探知や給水管の故障箇所を修繕する技術の向上を支援。09年からはこうした既存の水道網の改善に加え、水道整備を始める段階から無収水の発生を予防するため、給水管の無計画な配置や水道メーターの粗悪な施工が起らないよう、水道庁の水道網管理能力の強化を支援している。

同国でこのような開発課題が生じるのは、慢性的な財政難が背景にある。天然資源や大きな産業に恵まれていないことから、貿易赤字を海外からの援助や直接投資で補っているのが現状だ。ヨルダンが真の意味で自立し、安定した国づくりを進めていくためには、産業振興が必要不可欠だ。現在、最も重要な外貨獲得の手段は観光。死海や世界遺産にも指定されているペトラ遺跡などの観光資源を最大限に生かすため、JICAは99年から「観光セクター開発事業」を進めている。国立博物館や死海を望む展望台の建設など複数のプロジェクトを通じて観光地の整備を行っており、観光産業の振興に貢献している。



〔左〕日本人専門家の指導を受けながら漏水量の計測方法などを学ぶ水道庁職員

〔右〕日本の支援で建設されたヨルダン国立博物館の開館に向けて、日本人専門家が展示方法などを指導（撮影：久野真一）